

見える化の展開

～見える化を身近に感じよう～



国土交通省北海道開発局都市住宅課

1.見える化の展開

1.はじめに

自治体の皆様にどうやって展開していくべきか。



まずは、説明する自分が理解しなければ始まらない。



①自分の家や実家の周辺を可視化してみた。

夜間人口、将来人口推移など基本的なデータ。

②こんなデータがあったら便利かな。

大規模盛土造成地や液状化に関するデータなど。



操作するうちに自分自身に興味が湧いてきた。

2.見える化の展開

2.自治体へ展開方法

①存在を知ってもらう

- ・ 当局が入庁している札幌第1合同庁舎の掲示コーナーにPRポスター貼り出し、強制的に見える化。
- ・ いろんな場面でオリジナルPRパンフを配布する。

②MacBookを持ち歩く。

ちょっとした時間に売り込むチャンスを見逃さないように可能な限りMacBookを持ち歩く。

③立適計画策定支援キャラバンで売り込む

「自分のまち」をいろんなデータを基に見てもらう。

3.見える化の展開

2. 自治体への展開方法

◆可視化ツール紹介の初陣！（令和元年5月）

- ・ 自治体出向時の個人的繋がりから、立地適正化計画に関する説明を依頼されたので、併せて可視化ツールの紹介を実施。
- ・ 人口規模十数万人だが、2045年の人口予測では現在から20%減が見込まれている地方都市。
- ・ 夜の意見交換会でも「自分のまち」を可視化してもらった。



参加者は20人程度



飲み物をこぼさないように細心の注意を払った！

4.見える化の展開

2. 自治体への展開方法

◆各種協議時に売り込む（令和元年5月～）

- ・各種交付金や補助事業の打ち合わせで、自治体の方々が来庁された際に可視化ツールを紹介。
- ・決して『押し売り』にならないように相手の反応を見ながら展開するように心がける。
- ・協議に出たキーワードに関連した内容で可視化を試みる。



立地適正化計画の策定予定の自治体



立地適正化計画のハザードに関する協議



公共交通担当セクションとの協議

5.見える化の展開

2. 自治体への展開方法

◆立適策定支援キャラバン（令和元年10月～）

- ・当局管内には179の自治体があり、そのうち99の自治体が都市計画を持っており、昨年度末までに14自治体が策定・公表済み。
- ・策定意向調査において、検討中の31自治体に対して職員2人（係長と係員）で直接、去年10月から自治体に伺ってキャラバンを展開中。
- ・人口推移や人口密度、公共交通網と居住人口などを可視化しながら、ざくばらんなトークをしている。
- ・必ず伝えることは、「まちづくりや都市計画のプレーヤーとなる自治体を使ってこそ生きてくるツール」、「良くも悪くもまちが丸裸になる」の2点。

6.見える化の展開

3. これまでの取組みを振り返り

自治体の皆様の反応は様々であり、今後の展開に反映すべきこともたくさん見つかった。

(以下、自治体の感想や反応)

- ・ ツールの存在は知っていたが、内容の詳細は知らなかった。
- ・ 使ってみたいが市内のPC環境では見れないので自宅で見ている。
- ・ これからでも可視化連絡会に入れるのか。
- ・ 居住誘導区域を設定するのに大規模盛土造成地を重ねてみたい。
- ・ 出展データの更新時期はいつか。
- ・ 可視化連絡会に入りたいが研修会に参加する旅費の捻出ができない。

周知方法や自治体をもっと研修会に参加できるような環境づくりが必要
と強く感じたので、意見や要望を吸い上げて来年度に向けて工夫してい
きたい。

i-都市交流会議2020

7

北海道開発局の取組み

都市の紹介

ウポポイ（民族共生象徴空間）とは

・ 「民族共生象徴空間（愛称：ウポポイ）」は、我が国の先住民族であるアイヌの文化復興等に関するナショナルセンターです。

・ 2020（令和2）年の一般公開を目指して、北海道白老（しらおい）町ポロト湖畔において、主要施設となる「国立アイヌ民族博物館」（文化庁所管（工事は国土交通省が実施））、国立民族共生公園及び慰霊施設



ウポポイPRキャラクター
トゥレツポん



ウポポイ完成イメージ図（文化庁提供）

i-都市交流会議2020

8